

プリントは <https://www.math.sci.hiroshima-u.ac.jp/~takimoto/R7SuurikaisekiA.html> にも置いてあります。

今日の講義で説明できなかった次の定理の証明を述べます。結果はとても重要ですので、演習問題と共にしっかり学習してください。

定義. \mathbb{R}^N 上の連続関数のうち, support (台) が compact であるもの全体を $C_0(\mathbb{R}^N)$ と書く。ただし, $f \in C(\mathbb{R}^N)$ に対し

$$\text{supp } f = \overline{\{x \in \mathbb{R}^N \mid f(x) \neq 0\}}$$

と定義し, 関数 f の support (台) と呼ぶ。

定理. $1 \leq p < \infty$ のとき, $C_0(\mathbb{R}^N)$ は $L^p(\mathbb{R}^N)$ で稠密である。即ち

$$\forall f \in L^p(\mathbb{R}^N), \forall \varepsilon > 0, \exists \varphi \in C_0(\mathbb{R}^N) \text{ s.t. } \|f - \varphi\|_p < \varepsilon$$

が成立する。

[証明] $f \in L^p(\mathbb{R}^N)$ を実部と虚部に分けて (明らかにどちらも L^p 関数), さらにそれぞれを非負値 L^p 関数の差に書けば, 最初から f が非負値 L^p 関数として $C_0(\mathbb{R}^N)$ の元で近似できれば十分である。即ち, 任意に非負値関数 $f \in L^p(\mathbb{R}^N)$ と任意に $\varepsilon > 0$ をとったとき

$$\exists \varphi \in C_0(\mathbb{R}^N) \text{ s.t. } \|f - \varphi\|_p < \varepsilon$$

を示す。

Step 1. $m \in \mathbb{N}$ に対して $f_m(x) = \begin{cases} f(x) & (|x| \leq m) \\ 0 & (|x| > m) \end{cases}$ とおくと, $f_m \in L^p(\mathbb{R}^N)$ であり,

Lebesgue の収束定理より

$$\|f - f_m\|_p^p = \int_{|x|>m} |f(x)|^p dx \rightarrow 0 \quad (m \rightarrow \infty)$$

が言える (詳細は各自チェックせよ)。従って

$$\boxed{\exists n \in \mathbb{N} \text{ s.t. } \|f - f_n\|_p < \frac{\varepsilon}{3}}$$

が成立する (このとき, $f_n(x) = 0$ ($|x| > n$) であることに注意)。

Step 2. f_n は非負値可測関数であるから, 単調増大な非負値単関数列 $\{g_k\}_{k=1}^\infty$ の極限として書ける。任意の $k \in \mathbb{N}$ に対して $0 \leq g_k \leq f_n$ であるから,

$$|f_n(x) - g_k(x)|^p \leq f_n(x)^p \quad (\forall k \in \mathbb{N}, \text{ a.e. } x \in \mathbb{R}^N)$$

が成立する。 f_n^p は \mathbb{R}^N 上で可積分であるので Lebesgue の収束定理より

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \|f_n - g_k\|_p^p = \lim_{k \rightarrow \infty} \int_{\mathbb{R}^N} |f_n(x) - g_k(x)|^p dx = \int_{\mathbb{R}^N} \lim_{k \rightarrow \infty} |f_n(x) - g_k(x)|^p dx = 0.$$

従って,

$$\boxed{\exists K \in \mathbb{N} \text{ s.t. } \|f_n - g_K\|_p < \frac{\varepsilon}{3}}$$

が成立する (このとき, $0 \leq g_K \leq f_n$ より $g_K(x) = 0$ ($|x| > n$) であることに注意)。

Step 3. この g_K を

$$g_K(x) = \sum_{j=1}^{\ell} a_j \chi_{E_j}(x) \quad (a_j > 0, E_j : \text{可測集合 } (j = 1, \dots, \ell))$$

と書く¹. 補足プリント No.1 の**定理 B** より, 各 $j = 1, \dots, \ell$ ごとに

$\exists F_j$: closed, $\exists G_j$: open, bounded

$$\text{s.t. } F_j \subset E_j \subset G_j \text{ かつ } m(G_j \setminus E_j) < \left(\frac{\varepsilon}{3la_j}\right)^p$$

が成立する (ここで m は \mathbb{R}^N 上の Lebesgue 測度).

演習問題 No.3 [27] より, F_j 上で 1, G_j の外で 0, \mathbb{R}^N 全体で $[0, 1]$ に値をとる連続関数 h_j が存在する. $\varphi = \sum_{j=1}^{\ell} a_j h_j$ とおくと, $h_j \in C_0(\mathbb{R}^N)$ であるから φ も $C_0(\mathbb{R}^N)$ の元である. このとき, $G_j \setminus F_j$ の外では $\chi_{E_j} = h_j$ であり, $G_j \setminus F_j$ では $-1 \leq \chi_{E_j} - h_j \leq 1$ であるから

$$\|\chi_{E_j} - h_j\|_p = \left(\int_{\mathbb{R}^N} |\chi_{E_j}(x) - h_j(x)|^p dx \right)^{\frac{1}{p}} \leq m(G_j \setminus F_j)^{\frac{1}{p}} < \frac{\varepsilon}{3la_j}$$

である. 故に

$$\|g_K - \varphi\|_p = \left\| \sum_{j=1}^{\ell} a_j \chi_{E_j} - \sum_{j=1}^{\ell} a_j h_j \right\|_p \leq \sum_{j=1}^{\ell} a_j \|\chi_{E_j} - h_j\|_p < \sum_{j=1}^{\ell} a_j \frac{\varepsilon}{3la_j} = \frac{\varepsilon}{3}.$$

従って,

$$\|g_K - \varphi\|_p < \frac{\varepsilon}{3}$$

が成立する.

Step 1, Step 2, Step 3 より,

$$\|f - \varphi\|_p \leq \|f - f_n\|_p + \|f_n - g_K\|_p + \|g_K - \varphi\|_p < \frac{\varepsilon}{3} + \frac{\varepsilon}{3} + \frac{\varepsilon}{3} = \varepsilon$$

が得られ, $\|f - \varphi\|_p < \varepsilon$ を満たす $\varphi \in C_0(\mathbb{R}^N)$ の存在が示された. ■

注意. $p = \infty$ のときは**定理**は成立しません (演習問題 No.3 [23]).

¹ χ_{E_j} は特性関数です. 即ち, $\chi_{E_j}(x) = \begin{cases} 1 & (x \in E_j) \\ 0 & (x \notin E_j) \end{cases}$ です.

また, 「 $g_K \equiv 0$ のときはどうするんだ」と言われたら, そのときは $\varphi \equiv 0$ と取れば $\varphi \in C_0(\mathbb{R}^N)$ と $\|g_K - \varphi\|_p < \varepsilon$ が成立するので, $g_K \neq 0$ の場合だけを考慮してしまっても良いです.